

ゆび(土)、まじど！倫理が、心地よ、季節と合っていて、皆さんいかに  
お返ししよう！親祖先からいかに名字の普及と意識の啓蒙が

六月の第一句 自慢たれ 知らず 名づから 名づから 名づから

六月のテーマ

本もとを忘れず

# 名字の自覚

丸山竹秋

毎月第一週に配信する「今週の倫理」では、倫理研究所会長・丸山竹秋（一九二二—一九九九）のことを掲載します。



え・浅妻健司

**私**

私たちは、名字を案外粗末にしているのではなからうか。

名字は自分の生命のつながりという親祖先からの積み重ねを表すものであるにもかかわらず、まったく無関心であったり、中にはいやな名字だと思っていたりする。

私たちの身体や精神は、自分自身がどこからか材料を仕入れてきてつくったものではなく、親、祖父母、曾祖父母と、代々受け継いで頂いてきたものである。よって名字は自分が勝手につけられず、また法律上も勝手に変えることができない。祖先からの魂と血と、伝統の自覚をうながす貴重なものが、この名字なのである。

どうしてこのような名字になったのかは、すぐに分かるものと、なかなか分からないものがある。明治八年にすべての国民に名字をつけよとの布告が出され、あわてて家のまわりに小さな石があったので小石とつけたというものがあ。牛や馬がいたので、牛田とか馬場とか、その場で決めてしまったというものもあるという。

どうしても善意によいように受けて、そのように自覚してゆけば、実生活はそうなるのである。

「それは自分をへりくだって称したものだ。自分から善人ぶるよりも、はるかによい名字である」と言われて、心がすつきりし、人に対して威張らないよう、高ぶらないよう、迷惑をかけないようつとめてきたところ、次第に信用を増して、事業も栄えるようになった。

陰間という人は、かげの間にいるとは何とゆうつなことだろうとおもしろくなかった。ところがある易者から「陰とは静、柔軟などを意味するので、おだやかに暮らしていると必ず財産をたくわえられる」と聞き、怒らずあわてず、心を落ち着けて働いていたところ、実際にそのようになって驚いたという。

うでも、善意によいように受けて、そのように自覚してゆけば、実生活はそうなるのである。

あまりに姓名がよすぎると、かえって負けてしまい悪くなることがある。よすぎるといのは一方的な言い方だが実際はいい気になり油断したりすることがあるからだ。要は自覚の問題である。養子に入ったり、嫁にいたりして姓が変わると、その家の伝統を受け継ぐ。性格も次第に変わり、健康、不健康の点まで受け継ぐ。そうした家の自覚に立つからである。

ある藤原さんは、自分の祖先は藤原鎌足で、代々続いて支配者であったことが自慢である。何かにつけて古い系図を持ち出して得々と喋る。また始まったと次第に敬遠する人が増えて、ついに孤独で貧しい暮らしに落ちてしまった。これは一種のうぬぼれに依るもので、前にあげた名前負けの例に入るであろう。とにかくまず自分の名字を改めて自覚し直すことである。

（丸山竹秋選集）より